

No.2708

生業における音と身体技法の相互関係に関する映像人類学的研究
—ベトナム中部高原の少数民族村落を事例として—

同志社大学文化情報学部 助教
柳沢 英輔

生業の場では、環境音のほか、多様な身体動作を通して、人々の身体（またはその延長としての道具）とモノ、自然との接触・摩擦・衝突から様々な音が発生している。人々はそれらの音（振動）を意識的、無意識的に耳で聞いたり、身体で感じることによって、作業の進み具合を確かめたり、作業を行うタイミング、良し悪しの判断などを行っている可能性がある。つまり、生業の場における音に着目することによって、視覚的な側面からだけでは捉えきれない身体技法、すなわち身体とモノと自然の多様な関わり合いに迫ることができるのではないかと考えた。

本研究では、ベトナム中部高原コントゥム省にある複数のバナ族村落でフィールド調査を行った。平成27年度は、主に各村落のサウンドスケープを把握するとともに、それらの音をバナ族の人々がどのように聴いているのかを明らかにした。平成28年度は、主に狩猟者を対象にその狩猟方法などについて参与観察を行った。また各村落のゴング演奏、ゴング調律師の調律作業を映像と音で記録し分析した。

その結果分かったことは以下の点である。①彼らは日常生活で聞こえる様々な音を意味づけ、活用している。例えば、夜に鳴く猫や牛の声を不吉な予兆と考えており、蟬や特定の鳥の声から時間や季節を感じている。②主に年長のインフォーマントから、昔は聞こえたが現在では聞こえなくなった音として、妖精（特定の太木から聞こえる）、クジャク、ホエジカ、猿、虎などの声などが挙げられた。その背景に、森林伐採やそれに伴う野生動物の減少など生態環境の変化があることが示唆された。③ゴング演奏や調律の行程において、音と身体技法の相互関連が顕著に見られた。例えば、ゴング調律師は、平ゴングの第1倍音（基音）と第2倍音を3倍音の関係に、第2倍音とその高次倍音が整数倍の関係になるように音を聞き分けながら調律していることなどが明らかとなった。